

# 若年層のコミュニケーション能力に関する一考察

川 口 良

## A Study on the Communicative Competence of the Younger Generation

KAWAGUCHI Ryo

This paper, aiming to reconsider the communicative competence of the younger generation, examines the expressions of refusal, solicitation and question used by the youth, and the interactions among close friends in SNS (Social Networking Service). As a result, it is found that the youth make consideration in various ways to carry things smoothly. In particular, their communicative behavior with various “speech character” (Sadanobu 2006) in SNS indicates that they have a large repertoire of available option in Japanese. It is suggested that the communicative competence of the younger generation is characterized by their distinguished “ability to use many variations” (Shibuya 2008).

## 1. はじめに

若者の言語使用が「日本語の乱れ」として非難されるのは今に始まったことではない。それは、「若者」や「学生」といった社会集団が発生した明治期にまで遡ることができる。明治40年、二葉亭四迷の小説『平凡』には、主人公が伯父小狐三平の書生になる際、その心構えを訓戒される以下のような場面がある。

「からして勉強の合間には、少し家事も手伝ってもらわんと困る。なに、手伝うというても、たいしたことじゃない。まあ、取次ぐらいのものじゃ。まだ何ぞかぞほかに頼むこともあろうが、なに、皆たいしたことじゃない。行ってもらえような？」  
「は、何でも僕にできます事なら…」

「そ、そ、その僕がおもしろくない。君僕というのは同輩あるいは同輩以下むかに對うて言う言葉で、尊長者そうちようしゃに對うて言うべき言葉でない、そんなことも注意して、僕といわずに私わたくしというてもらわんとな…」

「は…つい気がつきませんで…」

(『日本文学全集1 坪内逍遥・二葉亭四迷』集英社より)

この時代には、「君」「僕」はまだ市民権を得ておらず、いわゆる「書生ことば」として若い世代が好んで用い、年配者には耳障りであったようだ。

このようにして明治以降、連綿と続く「若者ことば」批判は、21世紀に入ると若年層の「コミュニケーション能力」の低下を嘆く声となつて、就職活動に臨む学生たちはコミュニケーション能力を強く求められるようになった。その対応策として、巷にはコミュニケーション能力を

指南する実用書が溢れている。そこには「求められるべき理想的なCC (Communicative Competenceの略：引用者注)があるという暗黙の想定」(片岡・池田 2013：p.1)が存在する。日本語社会においては、まずは「自分の立場をわきまえ、目上に対しては敬語を用いて敬意を示す」という言語行動が、その「理想的なコミュニケーション能力」として挙げられるだろうか。

以下は、筆者が学生と個人面談をしていた時の体験である。丁寧体を使ってきちんと「学生と教師」という立場をわきまえた話し方をしていた学生が、自分の取っているある講義の感想を述べる時、突然「あの先生さー」で始め、「話がくどいんだよねー」と、まるで友だちと話す時の口調、いわゆるタメ口に切り替えて、その講義の様子を描写しながら、不満を訴えてきたのである。そしてその学生は最後に「(その講義の担当者である)〇〇先生には私が言ったって言わないでくださいね」と結んだ。つまり、内密にしてほしい「ある授業の不满」を訴える部分だけを普通体にしてタメ口で話すことによって、この学生は、聞き手である教師との心理的距離を友人間のものにまで縮め、自分の本音をありのままに伝えようとしたのだろう。実際、この部分を聞いていた筆者は、学生にぐんと迫られたように感じ、非常に大きな親近感を持って、あたかも友人の愚痴を聞いているような錯覚にとらわれた。そして、最後の「私が言ったとは言わないでほしい」と頼む部分には丁寧体を使って、適度な距離(「おっしゃらないでください」という尊敬語を使った距離までは離れない)をおくことによって、学生としての「わきまえ」を示し、「学生」の立場から「教師」である筆者に頼んだのである。

教師に対して、部分的ではあるにしても、タメ口を用いるという学生の言語行動は、「自分の立場をわきまえ、目上に対しては敬語を用いて敬意を示す」という「理想的なコミュニケーション能力」からはかけ離

れている。だからと言って、「この学生はコミュニケーション能力がない」と断じることができるのだろうか。むしろ、高いコミュニケーション能力を有していると考えたべきではないのか。筆者は、この学生がタメ口によって生き生きと眼前描写するその講義の場面に引き込まれ、学生の不満を共有することができたのである。敬語を用いて「学生と教師」の立場をわきまえていることを示しつつ、普通体のタメ口を用いて自分の不満を教師に共有させる。この学生が取ったコミュニケーション行動は、まさに巧妙な「コミュニケーションストラテジー」と言えるだろう。

以上のことを踏まえ、本稿では、大学院の授業で学生が取り上げた事例に着目して、若年層のコミュニケーション行動について検討し、若者たちの「コミュニケーション能力」をどのように捉えればよいのか、考えてみたい。

## 2. 「大丈夫です」という断り表現

これも筆者の経験である。学生と駅に向かう道すがら、どこかの店の店員がチラシを配るために近づいてきた。学生は、差し出されたチラシを前に「大丈夫です」と言って軽く頭を下げた。「大丈夫です」のあとにチラシを受け取るのだとばかり思っていた筆者は、受け取らずに素通りした学生を見て、「大丈夫です」が「けっこうです」と同様に「断り」を意味することに気付いた。

次は、筆者が大学生の甥とレストランで食事をしたときの出来事である。食事が終わって飲み物を選ぶときに、ウェイターがコーヒーか紅茶のどちらにするか聞いてきた。甥の「紅茶をお願いします」という返事に対して、ウェイターは「レモンかミルクをご用意できますが」と言う。甥はすかさず、「大丈夫です」と答えた。「どちらも大丈夫だ」つま

り「どちらでもいい」という意味に解した筆者は、甥に向かって「どちらか選びなさいよ」と注意したのだが、ウェイターは落ち着いて「ストレートですね」と言って去って行った。甥が用いた「大丈夫です」は「レモンもミルクも要らない」という、やはり「断り」表現であったのである。

このように、筆者のような中高年齢層には誤解を与えかねない「大丈夫」の意味用法については、『明鏡国語辞典第二版』（大修館書店2011年）が、「①丈夫で、しっかりしているさま。②危なげがなく安心できるさま。問題ないと保証できるさま。確か。」(p.1029)に続く意味として、次のように記述している。

- ③（俗）相手の勧誘などを遠回しに拒否する語。結構。「『お一ついかが？』『いえ、一です』『砂糖は二個？』『いえ、一です』」**表現** そんな気遣いはなくても問題はないの意から、主に若者が使う。危なげがない場面で使う用法で、本来は不適切。

『明鏡国語辞典第二版』（2011）が「主に若者が使う」と指摘するように、この「断り表現」として用いられる「大丈夫」は、おそらく若年層が使い始めた新しい用法である。2003年初版第二刷の『明鏡国語辞典』には③の記述がないことから、③が比較的最近発生した「大丈夫」の意味用法であることが分かる。

この「大丈夫」の用法について、2012年度の大学院の授業において、学生が調査し、報告した<sup>1</sup>。大学内にあるコンビニエンスストアのレジ

<sup>1</sup> 2012年9月25日「日本語教育特殊演習」における四谷厚子さんの報告。四谷さんの発表レジュメによれば、調査時期は2012年5月17日10時30分から13時までである。

における店員と客のやり取りを、店の承諾のもとに録音し、「大丈夫」の使われ方の実態を調査したのである。収集された「大丈夫です」の発話例を以下に示そう<sup>2</sup>。店員は40歳代女性、客はすべて学生である。

- (1) 店員1：いらっしゃいませ。こちら袋にお入れいたしますかー。  
客1：はい大丈夫です。  
店員1：はい、ありがとうございます。はい、カードお返しいたしまーす。  
はい、丁度ですね。レシートお持ちになりますか。  
客1：あ、大丈夫です。  
店員1：どうもありがとうございました。またお越しくくださいませー。
- (2) 店員2：温かいものと袋お分けいたしますかー。  
客2：はい、大丈夫です。
- (3) 店員3：Tポイントカードお持ちですか。  
客3：大丈夫です。

下線の「大丈夫です」は、すべて「断り」の意味で用いられている。(1)(2)の「大丈夫です」は、「けっこうです」に言い換えられる断り表現である。(3)の店員の「Tポイントカードお持ちですか」は、「お持ちでしたらポイントを加算しますが」という「申し出」を含意する疑問文であり、それに対して客は「(Tポイントカードを) 持っていないので、ポイントをもらう必要はない」という「断り」の意味で、一言「大丈夫です」と応答している。すべて、『明鏡国語辞典第二版』が述べるとおり、「そんな気遣いなくても問題はない」という意味で用いられた「大

<sup>2</sup> (1)~(3)の発話例は、四谷さんの発表レジュメから引用する。

丈夫です」である。このような店員の疑問文に対して、客である学生が応答文に用いた「大丈夫です」のうち、60%が「断り（拒否）」の意味を持つものであったという<sup>3</sup>。

では、若者たちはなぜ「いいえ、ありません／けっこうです」の代わりに、「大丈夫です」を使うようになったのだろうか（「大丈夫です」の前に、「いいえ」ではなく「はい」が付くのも大変注目される）。大学院の授業における学生の意見は、「相手の申し出に対して「ありません」と否定形で答えるのは、相手を傷つけるようで申し訳ない」、「けっこうです」という肯定形も、「いいです」と同じように拒否の響きが強く、使うのをためらう」というものであった。

相手が自分に働きかけてきた「勧誘」や「申し出」を断るといふ拒否場面は、コミュニケーション上、大変気を使う場面である。特に、(1)～(3)のような接客場面においては、客に対して店員は敬語を用いるのが一般的であり、実際、(1)「こちら袋にお入れいたしますか」「レシートお持ちになりますか」、(2)「温かいものと袋お分けいたしますか」、(3)「Tポイントカードお持ちですか」のように、客である学生が大変丁寧に待遇されていることが分かる。そのような丁寧に遇される接客場面においては特に、たとえ「客」であっても、断ったり拒否したりする場合に直接的な言語形式の「けっこうです」を使うのを避けたいという「配慮」が働くものと思われる。その結果、肯定的な意味を持つ「大丈夫」が用いられるようになったのではないか。先に紹介した、差し出されたチラシを前に「大丈夫です」と言って軽く頭を下げた学生の言語行動にも、直接的な断り表現である「けっこうです」の使用を避けるという、同様の配慮が窺える。

---

3 2012年11月13日「日本語教育特殊演習」における四谷厚子さんの発表レジュメより。

野田 (2014) は「聞き手や読み手に悪い感情を持たれないようにするために使う表現」(p.7)を「配慮表現」と呼び、形式から見たその種類として「間接的な表現」を挙げている (p.9)。断り表現として用いられる「大丈夫です」は、「本来は不適切」(『明鏡国語辞典第二版』p.1029)な用法だとしても、直接的な表現の「けっこうです」を避けて間接的に拒否を示した「配慮表現」の一つと考えられよう。「よろしかったらどうぞ」などと言ってチラシを差し出す人に、相手を傷つけないように「大丈夫です」と声に出してきちんと断るという言語行動は、無言で通り過ぎる多くの社会人の言語行動に比べれば、はるかに配慮の行き届いたコミュニケーション行動と言えるのではないだろうか。

### 3. 「いっしょに食事にいかないですか?」という勧誘表現

日本語の否定丁寧形には「(行き)ません」(以下、マセン形)と「(行)かないです」(以下、ナイデス形)の2つの言語形式が存在する。川口 (2014) では、この2形式の併存状態を、日本語において否定丁寧形がマセン形からナイデス形へ変化する途上の移行段階と捉え、その言語変化に関わる語用論的要因として、「ナイデス形へのシフトは、「叙述系のモダリティ」から「実行系のモダリティ」へと進む」(p.198)と結論付けた。つまり、「勧誘・依頼」というモダリティをもつ「いっしょに行きませんか」や「やってもらえませんか」は、もっともナイデス形になりやすい言語形式と言える。実際、川口 (2014) で調査対象とした自然談話コーパス165時間の中でこの「勧誘・依頼」のモダリティを持つナイデス形は、それぞれ次の1例しかなかった。

- (4) えー、じゃー、じゃーもー、店休日なかったら5月行きましょよよ。  
みんなで行かないですか↑



(現代日本語研究会編2002『男性のことば・職場編』)

(5) こちらはもう一回おしてもらってかまわないですか。

(国立情報学研究所音声資源コンソーシアム「理研ワープロ操作対話音声コーパス」)

「勧誘・依頼」のうち、特に「勧誘」の(4)「みんなで行かないですか？」には日本語母語話者の多くが違和感を持つのではないだろうか。筆者も、「いっしょに行かないですか？」は受け入れがたく、調査当時は、勧誘の「行きませんか？」が「行かないですか？」に変化するまでには相当時間がかかると考えていた。

ところが、2014年度の大学院の授業において、「ゆれていることば」をテーマにして10名の日本人学生にアンケート調査を行った学生が、勧誘表現として、マセン形(いっしょに食事に行きませんか?)ではなくナイデス形(いっしょに食事に行かないですか?)の方を自然だと答えた者が2名いたと報告したのである<sup>4</sup>。調査対象者は少ないものの、10名のうち2名がナイデス形の方を選んだという報告に大変驚いた。「いっしょに行きませんか？」よりも「いっしょに行かないですか？」の方が日本語として自然であると判断する学生が出てきたとすれば、現代日本語におけるナイデス形への言語変化はかなり速いスピードで進んでいることになる。

そこで、新たにアンケート調査を実施した。調査時期は2015年6月～7月、調査対象は20歳～24歳の大学院生及び学部生112名である。「いっしょに食事に行かないですか？」について、「自然だ。特に違和感はない」と思う場合は「○」、「やや不自然だ。少し違和感がある」と思う場合は「△」、「不自然だ。違和感が大きい」と思う場合は「×」を書いて

<sup>4</sup> 2014年11月25日、「日本語教育特殊演習」における常安琪さんの発表レジュメより。

もらった。その結果を表1に示す。この結果について $\chi^2$ 検定を行ったところ、1%水準で有意差が認められた。

表1 勧誘表現におけるナイデス形 人数(%)

	○	△	×	合計
いっしょに食事に行かないですか？	32(28.6)	54(48.2)	26(23.2)	112(100.0)

( $\chi^2=11.65, df=2, p<.01$ )

若年層日本語母語話者において、ナイデス形による勧誘表現を自然だと判断する者が28.6% (32名)、やや不自然だとする者が48.2% (54名)、合計すると76.8% (86名) に達した。それに対して、「不自然で違和感がある」と判断する者は23.2% (26名) に留まり、容認できない若年層は全体の4分の1に過ぎないことが分かった。特に、「○」(自然だ。特に違和感はない) と答えた若年層がすでに全体の3分の1近く (28.6%) いるという結果は、大変注目される。

「勧誘」や「依頼」という言語行動は「相手に対して行動することを求める文」であり、配慮表現が現れやすい(野田 2014 : p.7)。それでは「いっしょに食事に行かないですか？」に現れた「配慮」とは、どのようなものだろうか。

ナイデス形を用いた「一緒に行かないですか？」は、話し手が頭の中で想起した「一緒に行かない？」という心内発話に、デスを終助詞的に添えて丁寧体として発話されたものと考えられる。福島・上原(2004)が「丁寧体否定形の二形式の丁寧さレベルの二分化が、新しいスタイルレベルの誕生につながっている」(p.283) と述べているように、普通体にデスを添えただけの「一緒に行かないですか？」は、相手を普通体と丁寧体の中間の位置で捉えたことを示す言語形式であると思われる。目上であっても親しい関係にある相手(例えば親しい先輩など)を誘うよ

うな場合には、「いっしょに食事に行きませんか？」では丁寧すぎて堅苦しい。そうかと言って「いっしょに食事に行かない？」ではくだけ過ぎていて使うのが憚られる。そのように人間関係を慮った結果、その中間の丁寧さとして「いっしょに食事に行かないですか？」を用いるようになったのではないか。自然談話によって実際の使用状況を確認するまでは明言できないが、若者たちは自己を取り巻く人間関係を、普通体か丁寧体かという単純な二分法では捉えず、その中間レベルに位置する相手に対して働きかける言語形式として、ナイデス形による勧誘表現を選択したことが推測される。

「いっしょに食事に行かないですか？」という勧誘表現は、「親しい目上の人」に対する親しさと丁寧さを標示する配慮表現の一つと考えられる。

#### 4. 「えっ、それって本当です？」という疑問表現

相手に質問するとき、文末に「か」を付けず、上昇イントネーションによって疑問を表す文を「カ抜きことば」と言う。井上（1998）によれば、日本語におけるデスマス体の「カ抜きことば」は、次に示すⅠ～Ⅳの順序で進行しているという（pp.146-149）。

- Ⅰ. 動詞+マスの疑問詞疑問文「いつ行きます？」
- Ⅱ. 動詞+マスのyes-no疑問文「明日行きます？」
- Ⅲ. 名詞+デスの疑問詞疑問文「あの人だれです？」
- Ⅳ. 名詞+デスのyes-no疑問文「(お探し物は) スーツです？」

Ⅲ、Ⅳの段階の「～です？」が新しい疑問形式である。特に、Ⅳ「名詞+デス」の疑問文「(お探し物は) スーツです？」には違和感を持つ

人が多いかもしれないが、「～です？」という疑問文は、東京では1990年代半ばに記録されたという（井上 1998:p.147）。井上・鎧水編（2002）は、「えっ、それって本当です？」という疑問文を「聞いたこともない」のは関西で3割、関東で5割であること、また、広島敬語についての調査で「少々気を使う必要のある人」には「明日はごみの収集、休みです？」という疑問文が適切な表現だと答えた人が3分の2近くいたことなどから、「名詞+です？」の疑問文は「西日本で早かった可能性がある」（p.50）と述べている。

相手に情報を要求する「質問」という言語行動は、「勧誘」や「依頼」同様に、「相手への働きかけが強い文」であり、西日本出自の地域語であった「～です？」という疑問形式が東京で増加しつつあるとすれば、そこにはやはり関東圏若年層の何らかの「配慮」が働いたことが推測される。

そこで、まず、「～です？」形式の疑問文が関東圏の若年層にどの程度容認されているか知るために、3節で示したアンケート調査の項目に「カ抜きことば」を加えることにした。調査対象は、同じく20歳～24歳の112名で、「自然だ。特に違和感はない」場合は「○」、「やや不自然だ。少し違和感がある」場合は「△」、「不自然だ。違和感が大きい」場合は「×」を書いてもらった。その結果が表2及び図1である<sup>5</sup>。

<sup>5</sup>  $\chi^2$ 検定を行ったところ、「あの人だけです？」（ $\chi^2=18.99, df=2, p<.001$ ）、「えっ、それって本当です？」（ $\chi^2=14.01, df=2, p<.001$ ）、「明日はごみの収集、休みです？」（ $\chi^2=49.88, df=2, p<.001$ ）は1%水準で、「それ、おいしいです？」（ $\chi^2=8.10, df=2, p<.05$ ）は5%水準で有意差が認められた。

表2 「～です？」という疑問形式

人数 (%)

	○	△	×	合計
あの、だれです？	50(44.6)	46(41.1)	16(14.3)	112(100.0)
えっ、それって本当です？	20(17.9)	40(35.7)	52(46.4)	112(100.0)
明日はごみの収集、休みです？	7(6.3)	37(33.0)	68(60.7)	112(100.0)
それ、おいしいです？	20(17.9)	39(34.8)	53(47.3)	112(100.0)

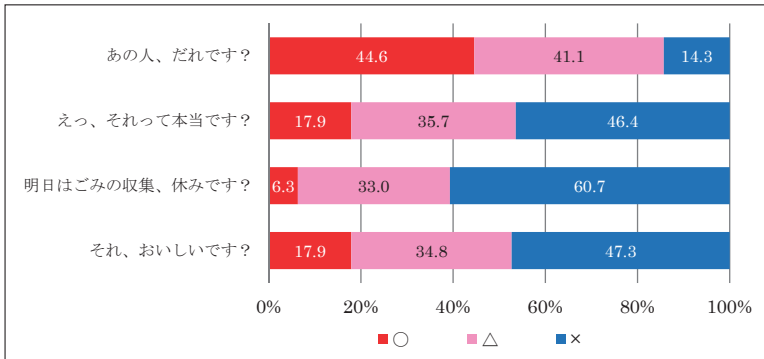


図1 「～です？」という疑問形式

表2、図1を見ると、疑問詞を伴う疑問文「あの、だれです？」は相当数の支持がある（○：44.6%、△：41.1%）のに対して、「名詞＋です？」形式の疑問文（「えっ、それって本当です？」「明日はごみの収集、休みです？」）は容認率が下がることが分かる。さらに、同じ「名詞＋です？」形式の疑問文でも、「…本当です？」と「…休みです？」では、前者の「○」が17.9%（20人）、後者が6.3%（7人）となって、容認率は「本当です？」の方が「休みです？」よりもかなり高い。「イ形容詞＋です？」形式の疑問文「おいしいです？」（○17.9%、△34.8%）が「本当です？」（○17.9%、△35.7%）とほぼ同じ容認率を示していることから、形容詞の「です？」形式の疑問文（「おいしいです？」）から「カ抜き

とば」が始まり、それが、形容詞的な性質の強い名詞（「本当」）の疑問文（「本当です？」）に及んだことが推測される。名詞らしい名詞（「休み」）の疑問文（「休みです？」）は若年層においてもまだ違和感が強いようだ。しかしながら、この、最も「○」の少ない「…休みです？」も、「○」と「△」を合わせると39.3%すなわち約4割の容認率を示していることから、「質問」の「～です？」形式への言語変化は、確実に進んでいることが理解される。

さらに、3節でみた勧誘表現の「いっしょに食事に行かないですか？」も文末の「か」が抜けることがあるのか知りたいと思い、調査項目に加えた。その結果が表3及び図2である。「勧誘」の「いっしょに食事に行かないです？」は、「…行かないですか？」と比べると格段に容認率が下がり、表2の「質問」の「～です？」と比べても最も「○」が少ない（3.6%、4人）。「勧誘」のカ抜きことば「いっしょに食事に行かないです？」は、さすがにまだ認められないだろうと思いつつ調査項目に加えたものであるが、「○」（3.6%、4人）と「△」（21.4%、24人）を合わせると、25.0%（28人）、4分の1に達したのは大きな驚きであった<sup>6</sup>。

表3 勧誘表現における「～です？／ですか？」 人数（%）

	○	△	×	合計
いっしょに食事に行かないです？	4(3.6)	24(21.4)	84(75.0)	112(100.0)
いっしょに食事に行かないですか？	32(28.6)	54(48.2)	26(23.2)	112(100.0)

<sup>6</sup> 「いっしょに行かないです？」の結果について $\chi^2$ 検定を行ったところ、1%水準で有意差が認められた（ $\chi^2=92.94, df=2, p<.001$ ）。

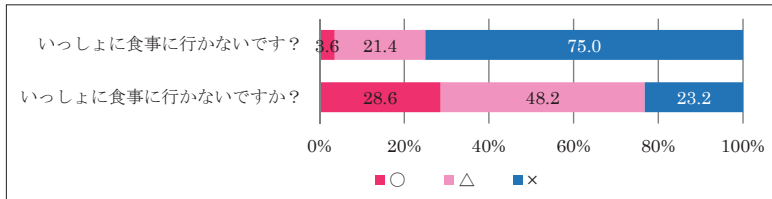


図2 勧誘表現における「～です? / ですか?」

日本語は、疑問の終助詞「か」を文末に付けることによって「質問」を表す。昭和以降、その「か」を落として、「どこにします?」のように上昇イントネーションによる疑問表現が発生し（井上 1998、井上・鎌水 2002）、それが、現在、「それ、おいしいです?」「それって本当です?」「休みです?」を経て、勧誘表現の「いっしょに食事に行かないですか?」にまで及んでいるのである。ここまで至った「カ抜きことば」が表す「配慮」とは、どのようなものなのだろうか。

先述したように、「質問」とは、相手に情報を要求するという、相手に強く働きかける言語行動であり、質問された相手は情報を提供することを強られる。そのような「相手に対する強い働きかけ」を明示するのが、文末に置かれる疑問の終助詞「か」だと考えられる。その「か」を落とすことによって「相手に対する強い働きかけ」を軽減すると同時に、上昇イントネーションによって相手に質問していることを伝える。「カ抜きことば」が「休みです?」という「名詞+です?」にまで及んだのは、このような「配慮」が働いたためと思われる。井上（1998）は、「人間はことばを使うときに相手のカオ、メンツをつぶさないように、様々な形で配慮して」おり、「相手のカオを立てるには」「自分の尋ねたいことを直接ことばに出して答えを要求する」疑問文は「避ける方が望ましい」と述べている（p.149）。相手への強い働きかけをできるだ

け軽減したい、相手に圧迫感を与えることを避けたい、言い換えれば、相手との間に程度な距離感を保とうという「配慮」<sup>7</sup>が、「カ抜きことば」の適用範囲を拡大させているのではないか。そう考えると、「えっ、それって本当です?」という疑問表現も、立派な「配慮表現」と言えるだろう。

## 5. 無料通話アプリケーションに見るコミュニケーション

本稿の最後に、現在の、まさにリアルタイムの「若年層のコミュニケーション」の様相として、SNS (Social Networking Service) における日本語の使用状況を観察することにする。

2015年度春学期、大学院の授業で学生が発表のテーマとして「若者ことば」を取り上げ、無料通話アプリLINEの画面を写真に撮ったスクリーンショットを資料として、親しい友人間における若者のコミュニケーションの在り様を発表した<sup>8</sup>。示された画面の中には、年配の筆者には通訳の必要があるほどの日本語も存在しており、若者たちがさまざまな手段を用いて仲間内の関係性を構築している様子が大変興味深く窺えた。そのスクリーンショットの一つを(6)に紹介する。発表のレジュメには「日文特有の表現」というタイトルが付されている。

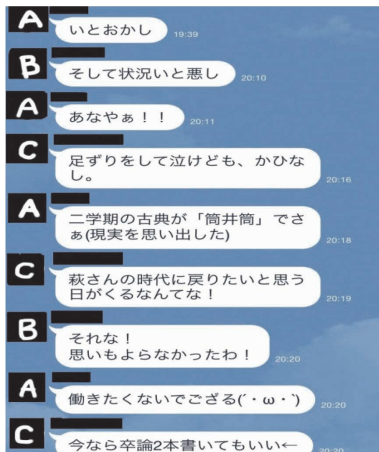
画面の黒い部分は個人名に関わるため、それぞれをA、B、Cとしている。3人とも文学部日本語日本文学科出身の22歳、女性教員である(出身地はAが群馬県、Bが秋田県、Cが千葉県)。A「いとおかし」、B「そして状況いと悪し」、A「あなやあ!!」、C「足ずりをして泣けども、かひなし」という古語の部分が、日文に所属していた3人

7 これはBrown & Levinson (1987) のPoliteness理論においてはnegative politenessにあたる言語行動である。

8 2015年4月21日「日本語教育特殊研究」における土田絵理香さんの発表。



(6) <日文特有の表現>



の専門であった「古典の世界」を示していると考えられる。彼女たちは卒業したのちも「日本語日本文学科所属」という大学時代のアイデンティティーによってこのような古語を「役割語」(金水 2003)として用い、いわば「日文キャラ」を発動しながら仲間意識を確認しているのではないか。Aの最後の発話「働きたくないでござる」は「武士ことば」という役割語による「侍キャラ」とも言うべき人物像、つまり「キャラクタ」(定延 2006)が連想される場所である。「働きたくない」という仕事に対する否定的な感情を、「侍キャラ」によって冗談めかして吐露したものと思われる。

金水(2003)は「そうじゃ、わしが博士じゃ」を「老博士のことば」として連想するような「特定のキャラクターと結びついた、特徴ある言葉づかい」(p.vi)を「役割語」と呼び、定延(2006)は「役割語によって暗に示される老博士やお嬢様のような、ことばの話し手としてのラベルづけされたキャラクタ」(p.120)を「発話キャラクタ」と呼んでいる。

携帯メールに代表される、「書きことば」と「話しことば」の中間にある電子メディアを介した「打ちことば」については、「ネット社会の若者ことば」(井上 2006)として、多くの研究成果が報告されている(三宅 2011、など)。ここでは、現在の若年層にとって重要なコミュニケーションツールであるスマートフォンの無料通話アプリケーションに注目し、そこでやり取りされるコミュニケーションの特徴について、「役割語」及び「発話キャラクタ」という観点から述べたい。

分析対象としたのは、2名の大学院生によって提供された、LINEとTwitterの画面を保存した36のスクリーンショット<sup>9</sup>で、22歳～25歳の大学院生及び社会人16名(女性13名、男性3名)の送受信者による総数215<sup>10</sup>の発話である(送受信時期は2014年6月～2015年6月)。

LINEやTwitterの画面からは、「関西人キャラ」、「男キャラ」、「老人キャラ」、「侍キャラ」、「日文キャラ」、「教師キャラ」、「幼児キャラ」<sup>11</sup>の7種類が取り出された。発話キャラクタは64発話に発動されており、7発話中に2種類のキャラクタが含まれていたため、総発話数215に占める割合は26.5%となって、全体の約4分の1を占めることが分かった。定延(2011)は「話し手が或るコミュニケーション行動を繰り返そうとすると、それを「得意技」とするキャラクタが発動される」(p.40)と述べているが、16人の若者たちは7種類の「キャラクタ」を繰り返すことによって、どのようなコミュニケーション行動を行おうとしたのだろうか。以下、特徴的な「発話キャラクタ」にスポットライトを当てながら考察する。

<sup>9</sup> スマートフォンの1画面を写真に撮ったものを1「スクリーンショット」とした。

<sup>10</sup> 画面上でやり取りされるメッセージは吹き出しによって示されるが、その、1「吹き出し」を1発話とした。

<sup>11</sup> 「日文キャラ」以外のキャラクタ名は、金水編(2014)、定延(2011)を参考にして名付けた。

用例(7)~(10)の発話者A~Fは、それぞれ同一人物である。同一人物による発話が続いた場合（異なる吹き出しで示される）は、行を変えて示すことにした。「××」は発話中の個人を特定する部分である。

- (7) A：やりました！  
B：ワイは断念や
- (8) A：合コンとかスペック低いと相手にされないじゃん。コミュニケーション能力も必要とされるし。  
絶対三千円無駄にしたなあ…とかなるよ絶対。  
B：そんなこと言ったらぼく一生彼女できないですやん  
A：あと5年もすれば出来るんじゃね？30近くなればみんな焦るだろうし

(7)は、おそらくゲームの達成度の話をしている場面だと思われる。A(24歳女性栃木県出身大学院生)が「やりました！」と、やり遂げたことを示したのに対して、B(23歳男性栃木県出身会社員)が「ワイは断念や」と「関西人キャラ」を繰り出している。(8)は合コンに関する話の中で、Aが合コンに参加する場合の否定的側面を述べたのに対して、Bは、そんなことを言っていたら「自分には一生彼女ができない」という悲観的な予測を「関西人キャラ」を発動して述べている。(7)では関西弁の男性自称詞「ワイ」を用いたBが、(8)では標準語の「ぼく」を用いている。その「ぼく」に呼応するように文末が丁寧体となり、それに関西弁の文末詞「やん」を付けて、「ぼく～ですやん」となって、悲観的な将来を標準語でつぶやこうとする「関西人キャラ」が連想される。(7)の「断念する」や(8)の「一生彼女ができないかもしれない」という悲観的心情を、関西弁の軽さと明るさにのせることによって深刻さが軽減

され、相手の心理的負担も軽減される。そのあと女性のAが、「あと5年もすれば（彼女が）出来るんじゃね？」と、「関東圏の男キャラ」を繰り出してBを励まそうとしているのが興味深い。「関西人キャラ」や「男キャラ」によって相手の心理的負担を軽減したり相手を励ましたりする。つまり、発話キャラクタが相手への「配慮」として機能している例と考えられるだろう。

(9) C：最近連絡とれてさー2日、一緒にお茶でもするー???

A：会いたいけど、京都のスケジュールまじで鬼すぎたから僕は早く帰りたいでふ

(9)は、C（24歳女性栃木県出身会社員）の「一緒にお茶でもする？」という誘いを、Aが断っているところである。女性のAが「僕は早く帰りたいでふ」と、男性自称詞「僕」を使って「男キャラ」を発動し、丁寧体の文末「です」を「でふ」にして気の抜けたような軽みを持たせている。「断る」場面で「男キャラ」、それも「僕」という「真面目な男子キャラ」を繰り出し、文末に「です」の代わりに「でふ」を用いてかわいらしさをアピールしてシリアスさを避ける。こうして相手の誘いを断ることを受け入れてもらいやすくする。これも、「断る」際の相手への「配慮」と言えるのではないだろうか。

(10) F：おつあり～<sup>12</sup>

D：××の授業参観行きたいww

F：まじかww

---

<sup>12</sup> 「おつかれさまと言ってくれてありがとう」の略。

D：しれっと混じってたい

F：じゃあ××ちゃんに発問するわw

D：まさかのww

宮沢賢治ならまかせろー

F：はい！その××さん＝°ω°）っ

D：ふあい！××てんでー！

F：むしろ授業して欲しいww

D：やだよ教職とってないから教える力なくてカオスになる

(10)では、教員であるF（22歳女性東京都出身）が「はい！その××さん」と「教師キャラ」を発動したのを受けて、Dが「はーい！××先生！」という「生徒キャラ」で答えるべきところを、「ふあい！××てんでー！」という「幼児キャラ」に変えている。Dはその前に、「宮沢賢治ならまかせろー」と「男キャラ」を繰り出しているが、これらのキャラクタは、教師であるFの授業を見に行きたいというDに対して、Fが「じゃあ発問する」と言ったために、逆にDが慌てたことから発動されたのではないか。特に「ふあい！××てんでー！」という「幼児キャラ」は、おどけや遊び的な気分が強く、「発問される」という事態を「冗談」の中に回収して避けようとしたものと考えられる。

以上の観察から、若者たちは、SNSにおいて自身の性別、年齢、出身地、職業といった社会的属性を超え、役割語を駆使してさまざまな発話キャラクタを繰り出していることが理解される。田中（2011）は「話し手自身が本来身につけている生まれ育った土地の「方言」（生育地方言）とは関わりなく、日本語社会で生活する人々の頭の中にあるイメージとしての「〇〇方言」を、その場その場で演出しようとするキャラクター、

雰囲気、内容に合わせて臨時的に着脱すること」(p.3)を「方言コスプレ」と呼んでいる。若者たちは、地域方言による「方言コスプレ」だけでなく、社会方言によっても種々の「人物像」すなわち「キャラクタ」を「コスプレ」していると言えよう。その「キャラクタ・コスプレ」がもたらすおどけや遊び的気分が、深刻さを軽減し、相手の誘いや申し出を断りやすくしている。発話キャラクタの発動による「キャラクタ・コスプレ」は、事を円滑に運ぶための「配慮」として機能するものと捉えられるだろう。

## 6. 若年層の「コミュニケーション能力」とは

以上、大学院の授業で学生が取り上げた事例に着目して、若年層のコミュニケーション行動について検討してきた。その結果を踏まえ、最後に、若年層の「コミュニケーション能力」について考察を加えたい。

相手に悪い感情をもたれないように「断り表現」として「大丈夫です」を用いたり、相手を丁寧体と普通体の中間で捉える「いっしょに行かないですか?」という「勧誘表現」を出現させたり、相手への強い働きかけを避けて「えっ、それって本当です?」のように疑問文から「か」を抜いたりする。また、SNSにおける親しい友人間のやりとりでは、さまざまな発話キャラクタを繰り出して事を円滑に運ぼうとする。これらはすべて、相手に対する「配慮」に基づくものと考えられ、若者の人間関係に対する鋭敏さの発露なのかもしれない。

渋谷(2008)は、「コミュニケーション能力」を「多変種能力・多変種使用能力」として捉え直し、「現代日本語社会に生きるわれわれは(またおそらく有史以来の日本語使用者たちも同じように)、日常生活において運用できる日本語のレパートリーとして、さまざまな変種を持っている。われわれは、だれもがその複数の変種を操ることのできる多変

種使用者である」(p.179)と述べている。若者たちが自身の性別、年齢、出身地などの社会的属性を超えてさまざまな発話キャラクタを繰り出すコミュニケーション行動からは、彼らの「運用できる日本語のレパートリー」の広さが窺い知れる。若年層の「コミュニケーション能力」は、卓越した「多変種使用能力」によって特徴づけられると言えよう。

今回は、大学院生が発表した調査報告に新たな調査を加えるに留まり、SNSによるコミュニケーション行動の観察結果についても、限られたデータに基づくものでしかない。今後は、調査を充実させ、若年層のコミュニケーション能力の諸相について実証的に明らかにしていきたい。

## 謝辞

LINE及びTwitterの提供に快く応じてくれた2名の大学院生とアンケート調査に協力してくれた学生みなさんに心より感謝します。

## 参考文献

- 井上逸兵 (2006) 「ネット社会の若者ことば」『言語』35(3)、大修館書店、pp.60-67
- 井上史雄 (1998) 『日本語ウォッチング』岩波書店
- 井上史雄・鏈水兼貴編著 (2002) 『辞典<新しい日本語>』東洋書林
- 片岡邦好・池田佳子 (2013) 「序章「コミュニケーション能力」再訪」  
片岡邦好・池田佳子編『コミュニケーション能力の諸相－「変移・共創・身体化」－』ひつじ書房、pp.1-28
- 川口良 (2014) 『丁寧体否定形のバリエーションに関する研究』くろしお出版
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語役割語の謎』岩波書店

- 金水敏 (2011) 「現代日本語の役割語と発話キャラクタ」 金水敏編 『役割語研究の展開』 くろしお出版、pp.7-16
- 金水敏編 (2014) 『<役割語>小辞典』 研究社
- 定延利之 (2006) 「ことばと発話キャラクタ」 『文学』 7(6)、岩波書店、pp.117-129
- 定延利之 (2007) 「キャラ助詞が現れる環境」 金水敏編 『役割語研究の地平』 くろしお出版、pp.27-48
- 定延利之 (2011) 『日本語社会のぞきキャラくり－顔つき・カラダつき・ことばつき－』 三省堂
- 渋谷勝己 (2008) 「言語変化のなかに生きる人々」 金水敏・乾善彦・渋谷勝己 『日本語史のインターフェース』 岩波書店、pp.177-203
- 田中ゆかり (2011) 『「方言コスプレ」の時代』 岩波書店
- 野田尚史 (2014) 「配慮表現の多様性をとらえる意義と方法」 野田尚史・高山善行・小林隆編 『日本語の配慮表現の多様性－歴史的变化と地理的・社会的変異－』 くろしお出版、pp.3-20
- 福島悦子・上原聡 (2004) 「「言いません」としか僕は言わないです－会話における丁寧体否定辞の二形式－」 南雅彦・浅野真紀子共編 『言語学と日本語教育Ⅲ』 くろしお出版、pp.269-286
- 三宅和子 (2011) 『日本語の対人関係把握と配慮言語行動』 ひつじ書房
- Brown, P. and S.C. Levinson (1987) *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.